

日本臨床教育学会 第14回研究大会開催要項 (第2次案内)

1. 大会日程

*理事会：2024年10月25日(金) 15:00~17:00

*1日目：2024年10月26日(土) 9:30~17:20

受付	自由研究発表(A) 一般研究	休憩	課題研究 I・II	休憩	自由研究発表(B) 実践事例研究	
9:30	10:00	12:00	13:00	15:00	15:20	17:20

1日目終了後、近隣会場に移動して情報交換会を行います。

*2日目：2024年10月27日(日) 9:00~15:50

受付	総会	休憩	課題研究 III・IV	休憩	シンポジウム	
9:00	9:20	10:30	10:50	12:50	13:50	15:50

2. 会場

帝京平成大学 中野キャンパス

〒164-8530

東京都中野区中野 4-21-2



↑中野駅からのルート



3. 大会実行委員会

大会実行委員長	土永 葉子（帝京平成大学）
大会実行委員	荒井 嘉夫（東京電機大学）
	小野 いずみ（帝京平成大学）
	佐藤 かほり（帝京平成大学）
	川越 孝洋（帝京平成大学）

4. 開催方法

- * 帝京平成大学中野キャンパスを会場として対面での開催を基本としています。ただし、課題研究、シンポジウムについては、ZOOMによるオンライン参加も可能となっています。(自由研究発表は対面実施のみです。オンライン配信はいたしませんのでご注意ください。)
- * 参加申し込み時には、現地参加・オンライン参加のいずれかの方法を選択してください。
- * 参加申し込み時には、現地参加またはZOOM参加のいずれかを選択してください(自由研究発表の発表者は現地参加のみとなります)。決済後の参加方法(現地参加/ZOOM参加)の変更については、**学会事務局**【crohde2011@yahoo.co.jp】にご連絡ください。

5. 大会参加費

- * 大会参加費は、下記の通りです。
一般：5,000円 学生・院生：2,000円(現地参加もオンライン参加も同額です。)
- * キャンセルされた場合の返金はいたしません。大会運営費とさせていただきます。
- * 大会には、会員以外の方でも、上記の参加費でご参加いただけます。

6. 参加申し込みについて

- * 大会参加に関しては、**事前申し込み制のみ**とさせていただきます。
- * **申し込み期限：2024年10月26日(土)締め切り**
- * 大会参加の申し込みと参加費の入金は、イベント管理ツール「Peatix」にて行います。
申し込み時に、現地参加かオンライン参加かを選択して、チケットを購入(申込)してください。
- * なお、現地参加の場合、宿泊、昼食に関しては、各自で対応をお願い致します。大学周辺には、昼食場所、コンビニ等があります。
- * 情報交換会は、10月26日(土)18時頃より「ナカノヤ NYAcafe」にて開催します。会場から中野駅方面(区役所方面)に徒歩5分程度です。情報交換会への参加を希望される方は、チケット購入の際に情報交換会のチケットをお申し込みください。ただし、情報交換会の参加者が60名に到達次第、情報交換会のチケット販売を打ち切らせていただきます。
- * 「発表要旨集録」は、事前申し込みのあった方のメールに添付ファイルでお送りします。
- * 「Peatix」による申し込み方法は、別添資料をご参照ください。

7. 自由研究発表の区分・発表時間について

【一般研究と実践事例研究の区分】

A：一般研究

臨床教育学の研究や実践の発展に関する一般的な学術研究を募集します。子ども理解、障がい児・者の理解・支援、教育実践、幼児教育・保育、若者自立支援、教師教育、教師の専門性、人間発達援助、教師・援助者の課題・困難性、若手教師・援助者の自己形成、心の傷とケア、子ども・若者の身体、教育思想・教育実践史などの領域がこれまで報告されています。

B：実践事例研究

学校や福祉施設、医療・援助に携わる諸機関、NPO・NGO など、地域における一回性の教育実践や発達援助実践を、研究者と実践者が互いの立場を尊重しながら対等の関係で学びあい、新たな問いや学問研究の端緒を創発することをめざします。教育現場はもとより、心理、福祉、保育、養護、保健、療育、医療・看護、行政など、さまざまな領域の、あるいは領域を越えた発達援助実践に関わる研究を募集します。発表経験の有無は問いませんが、場合によっては、発表形式の確認をすることがあります。

※ A・Bともに、学会事務局において申し込まれた発表内容を考慮したうえで、大会時の分科会を組織いたします。

【発表時間】

A：一般研究は、発表 20 分、質疑応答 5 分です。

ただし、共同研究で発表者が複数の場合は、発表 40 分、質疑 10 分とします。

B：実践事例研究は、1 報告 60 分（概ね発表 40 分、質疑応答 20 分）となります。

発表者が複数の場合でも 1 報告 60 分です。

8. 会場受付について

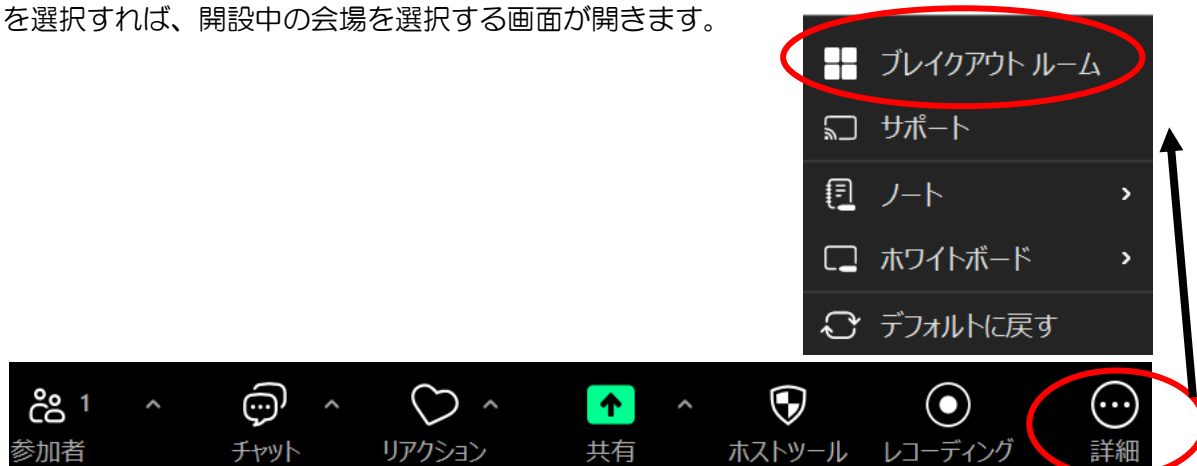
- * 大会会場の受付場所は、**202 教室前**となります。会場に着きましたら必ず受付をしてください。
- * 受付では、事前に申し込まれた氏名を印字した吊り下げ名札を用意しています。名札を受け取ったのち、大会にご参加ください。
- * 大会当日の金銭のやり取りはしませんので、必ず事前の参加申込を行ってください。
- * 事前参加をされていない方が会場に来られた場合、その場で Web 手続き（本学会の大会用 Peatix ページからの申し込み）をしていただきます。手続き完了の通知メールを受付にて提示し、吊り下げ名札を受け取りください。なお、氏名欄にはご自身でご記入をお願いします。また、発表要旨集録は大会前にメール送信を終えていますので、その場ではお送りできません。予めご理解ください。

9. オンライン参加に関するお願い

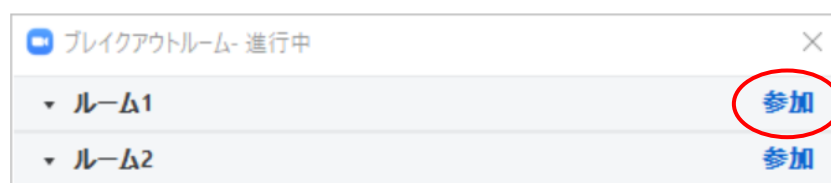
- 1) 発表要旨集録は大会の1週間前までに、司会者・発表者・参加申し込みをされた方々にメールで配布いたします。
- 2) Zoom の利用時に、登録氏名が異なる場合がございます。その際は、ご本人の氏名に変更してくださいませようお願いします。
- 3) 発表中、司会者・発表者以外の参加者は、Zoom のビデオ及びマイクをオフ（ミュート）にしてください。インターネット回線の負担軽減が目的ですので、ご理解をお願いします。なお、会場によって司会者からオン・オフの指示がある場合は、上記の限りではありません。
- 4) 質疑応答においてご発言される方は、ビデオとマイクをオンにしてください。
- 5) 課題研究においては、「ブレイクアウトルーム」機能を用いて会場を設定します。はじめに、司会者・発表者を優先的に振り分け、事前打ち合わせをしていただきます。参加者は、開始時間の 5 分前を目安に、参加したい分科会を選び、会場を移動してください。移動方法がわからないときは、運営者がサポートいたします。

ZOOM 上での会場移動の方法（※PC 版を参考）

- ① 同時時間帯に別の会場がある場合、移動に際しては画面上の「詳細」から「ブレイクアウトルーム」を選択すれば、開設中の会場を選択する画面が開きます。

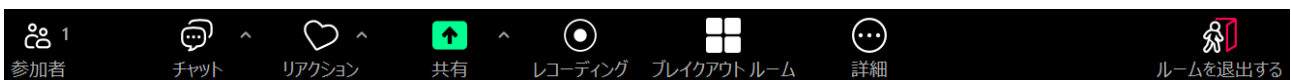


- ② 次に、移動したい会場の「参加」をクリックすると、その会場の画面に移動します。

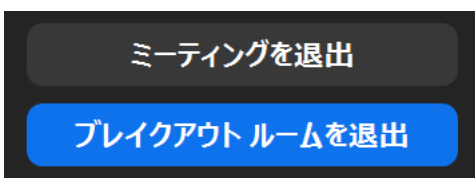


【注意】 会場（ブレイクアウトルーム）の自由選択は、アプリケーションのバージョンが古いと機能しないため、あらかじめ最新版のアップデートをお願いします。

- 6) 「ブレイクアウトルーム」を開設している間は、会場担当がそれぞれの分科会に参加しています。問題が生じた場合は会場担当者、あるいはメインルームの ZOOM 担当者にチャット機能などを通じてお伝えください。
- 7) 課題研究においては、討議が終わりましたら、会場ごとに休憩あるいは解散とします。
すべての会場が終了したことを確認したのち、ZOOM 担当者が「ブレイクアウトルーム」を解除いたします。解除すると、すべての ZOOM 参加者が自動的にメインルームに戻ります。それを待たずに、ご自身でブレイクアウトルームを退出する場合は、下記をご参照ください。



ブレイクアウトルームから退室する場合は、「ルームを退室する」をクリックしてください。下図の画面に切り替わりますので、都合に合わせて退出してください。



ZOOM を終える場合は、こちら

ZOOM は终えず、メイン画面に戻る場合はこちら

- 8) 発表に際しては、ZOOM の「画面共有」が有効となっています。発表要旨集録以外の提示資料がございましたら、発表者自ら「画面共有」にて提示してください。
なお、発表または提案においては、日本臨床教育学会の〈倫理規程〉を遵守してください。特に、個人情報の保護を徹底してください。

10. 自由研究発表及び課題研究における司会者・発表者の皆様へ

- 1) 「自由研究発表 (A) 一般研究発表」の司会者及び発表者の皆様は、10月26日(土)9:40に各会場に集まってください。開始5分前までに司会者との顔合わせや提示資料の確認、動作確認などを行います。各発表につき、発表時間20分、質疑応答5分(共同研究で発表者が複数の場合は、発表40分、質疑10分)です。すべての発表が終了しましたら、部会ごとに20分程度の全体討議を設けたのち、会場ごとに閉会してください。
- 2) 「自由研究発表 (B) 実践事例研究発表」の司会者及び発表者の皆様は、10月26日(日)15:00に各会場に集まってください。開始5分前までに司会者との顔合わせや提示資料の確認、動作確認などを行います。各発表につき、発表時間40分、質疑応答20分です。すべての発表が終了しましたら、会場ごとに閉会してください。全体討議は設けませんが、残り時間があれば、行っていただいても差し支えありません。
- 3) 課題研究及びシンポジウムの司会者・発表者の皆様は、それぞれの開始時間15分前までに各会場

に集まるか、ZOOM にアクセスしてください。課題研究及びシンポジウムの司会者・発表者のうち、ZOOM で参加される方は、直前の打ち合わせにおいてブレイクアウトルームを設定することがあります。その際は、担当の指示に従っていただきますようお願いいたします。

- 4) 課題研究においては、ZOOM を用いてオンライン配信を行います。「画面共有」が有効となっておりますので、当日提示する資料がありましたら、発表者自ら「画面共有」にて提示してください。なお、発表内で触れる第三者の個人情報保護を徹底してください。

***ZOOM 参加者に対して資料配布が可能な場合は、当日チャットに添付してください。**

- 5) 現地で発表される方は、当日提示する資料が配布可能であれば、対面参加者用に各自印刷してご持参ください。

***印刷部数の目安は、自由研究発表20部、課題研究30部、シンポジウム80部です。**

***当日パワーポイントなどで資料を提示する場合は、各会場にパソコンがありますので、発表資料のデータを保存した USB を持参してください。ただし、互換性がよくない場合もありますので、可能であればご自身のノートパソコンもご持参ください。**

- 6) 課題研究やシンポジウムにおける発表時間や発表順序につきましては、それぞれ異なりますので、担当者を中心に事前に確認してください。直前にも確認をお願いいたします。

- 7) 自由研究発表、課題研究、シンポジウム、それぞれについて、記録を残させていただきます。そこで、**各会場の司会者あるいは参加者の中から「記録者」を決めていただきますようお願いいたします。**

記録者は、なるべく会員の方をお願いしてください。大会後、司会者の方に記録者についてお伺いします。その際、記録者の方の氏名、メールアドレスをご教示ください。後日、事務局から記録者に連絡をいたします。

記録者の方は、各会の内容を踏まえた 1600 字程度の記録を事務局に提出していただきます。この記録は、学会通信に掲載させていただきます。

12. 発表辞退について

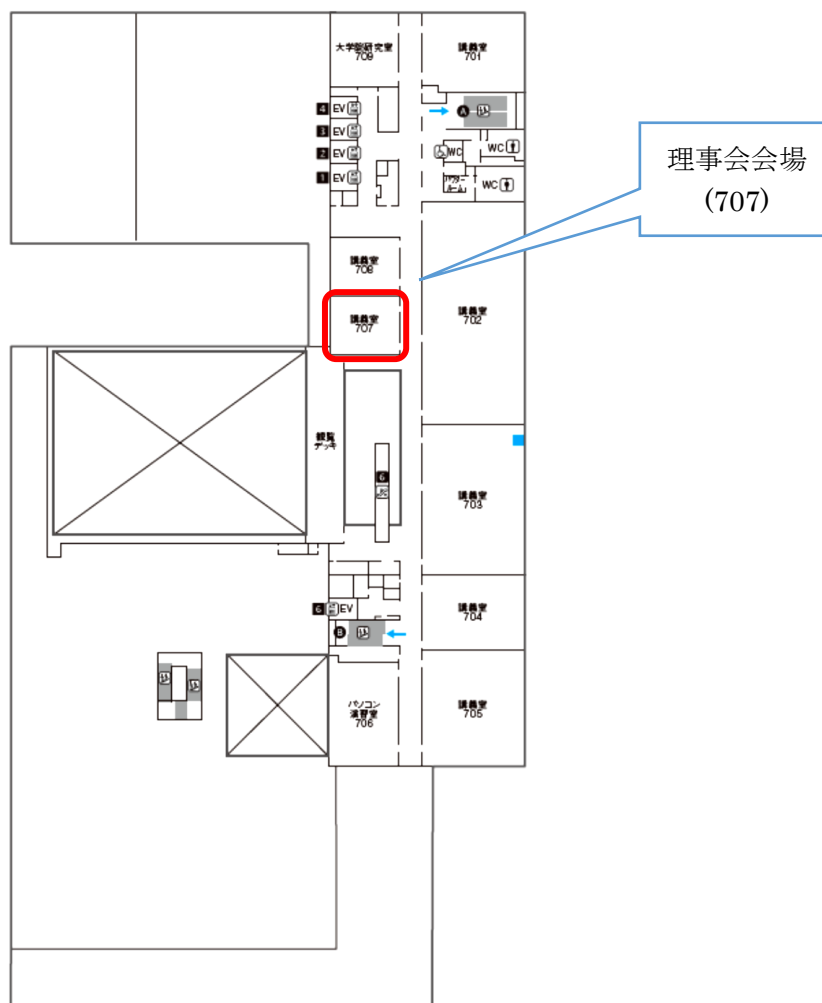
- * 自由研究発表の予定者（共同研究の場合はその代表者）が発表を辞退する状況となった場合、大会発表要旨集録の差し替えを行う必要が生じるため、すみやかに学会事務局にご連絡ください。
- * 共同研究で申し込みをされたものの共同研究者（発表予定者）の参加ができなくなった場合は、あらかじめ共同研究者間で代行を決めたうえで発表に臨んでください。
- * 発表辞退があった場合、その後の発表時間は繰り上げて対応いたします。大会期間中に発表辞退があった場合、または発表者が会場に参加されていない場合も同様の対応となります。
- * 自由研究発表（A：一般研究）での共同発表を予定していたが、共同研究者の不参加によって単独発表になる場合は、単独での発表時間（発表 20 分、質疑応答 5 分）を適用し、その後の発表時間を繰り上げて対応いたします。

- * 避けられない事情により発表者が当初予定されていた発表時間に遅れて参加した場合、自由研究発表の残り時間が、遅れて参加した発表者の発表予定時間よりも多い場合に限り発表を許可するものとします。【参考】自由研究発表 A：一般研究（単独発表）の場合は25分、自由研究発表 A：一般研究（共同発表）の場合は40分、自由研究発表 B：実践事例研究の場合は60分が残っていない場合は、遅れての発表はできません。

11. 大会会場一覧

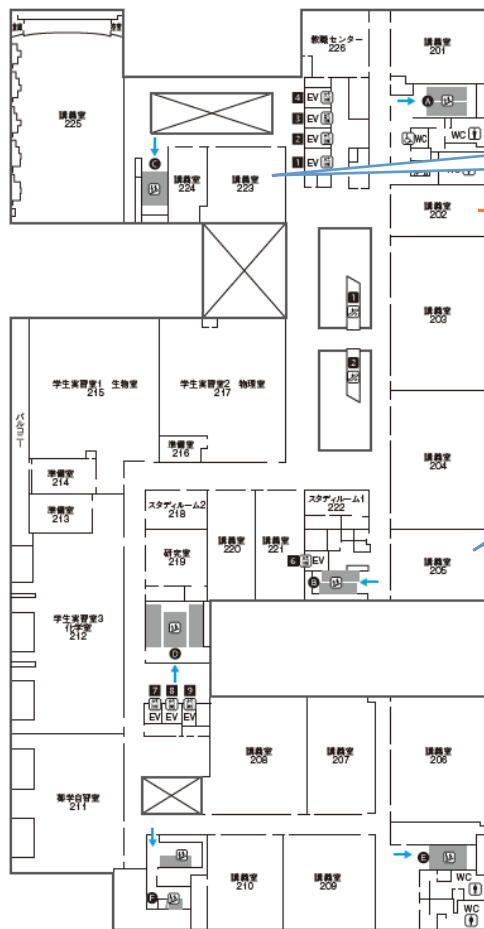
10月25日（金）：理事会（15時～17時） 7階 707

7階



10月26日(土): 自由研究発表(A) 一般研究(10時~12時) 2・3階

2階



第1分科会
(2階 201)

第2分科会
(2階 223)

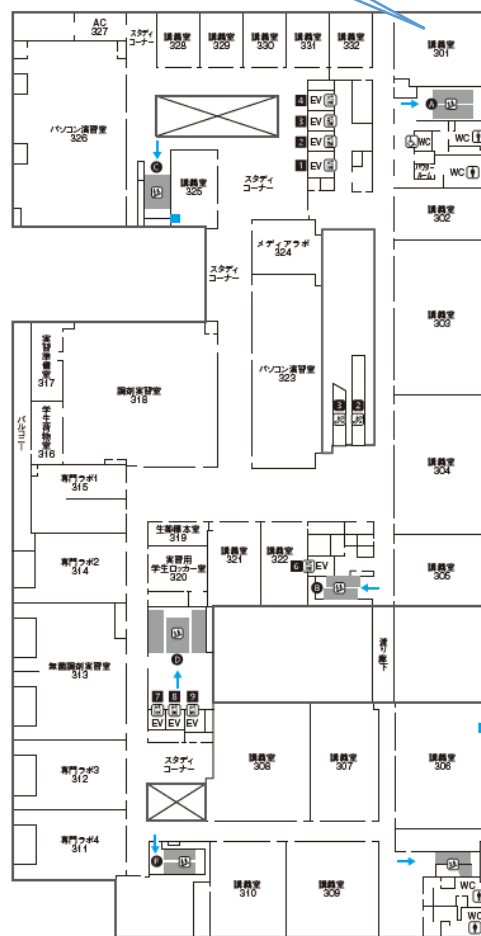
大会本部
(2階 202)

受付
(2階 202前)

第3分科会
(2階 205)

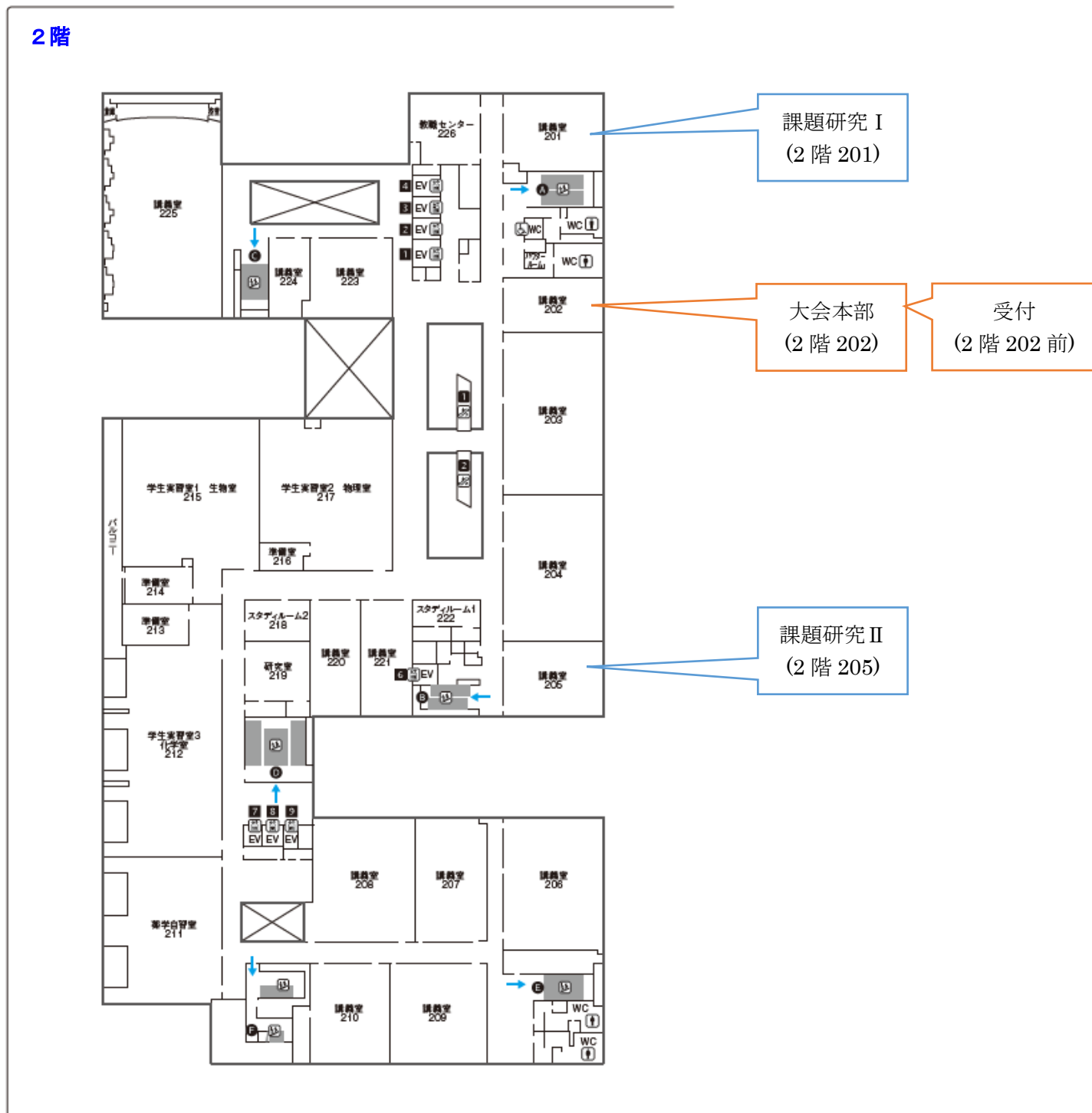
第4分科会
(3階 301)

3階



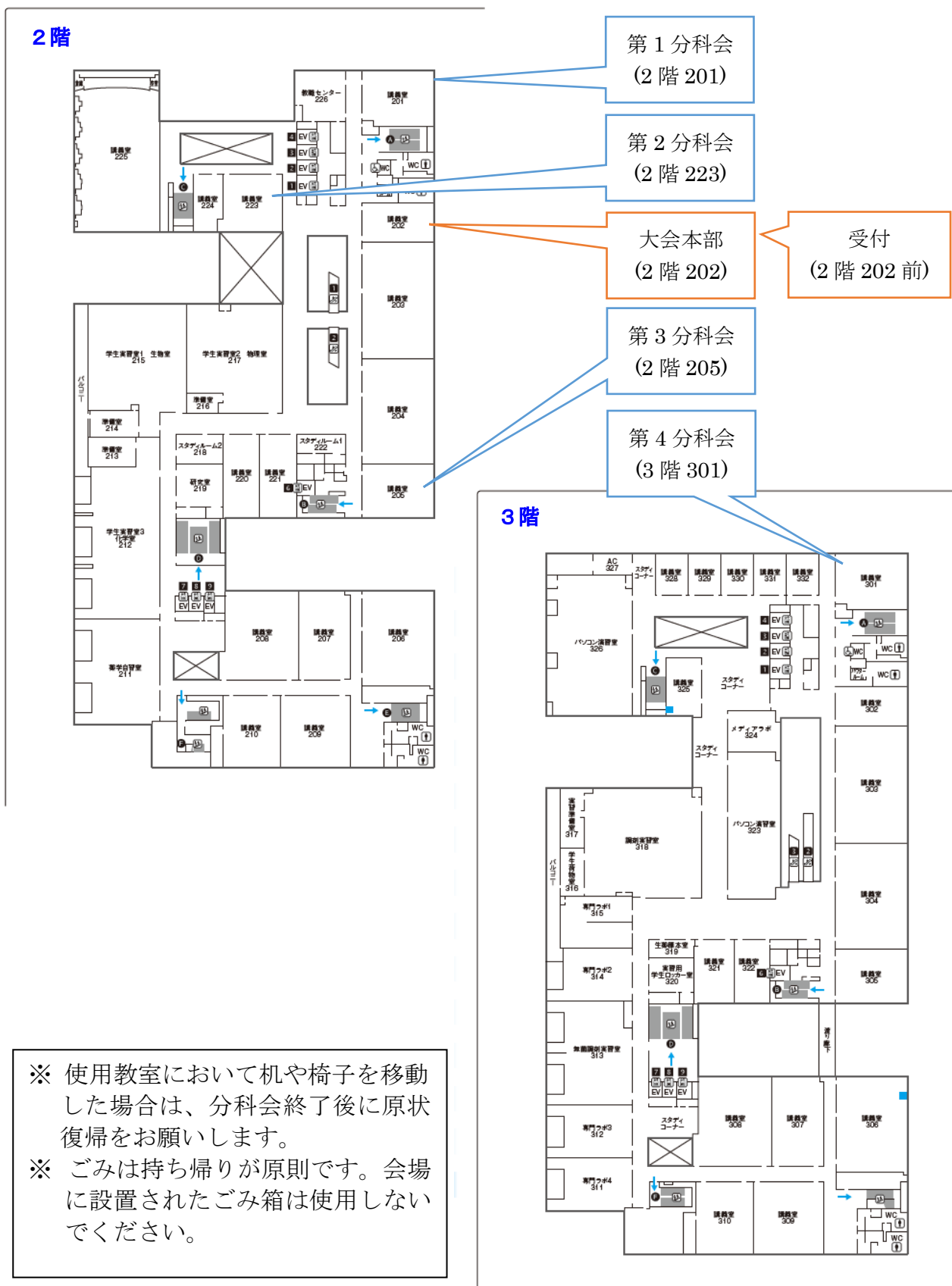
- ※ 使用教室において机や椅子を移動した場合は、分科会終了後に原状復帰をお願いします。
- ※ ごみは持ち帰りが原則です。会場に設置されたごみ箱は使用しないでください。

10月26日(土): 課題研究 I・II (13時~15時) 2階

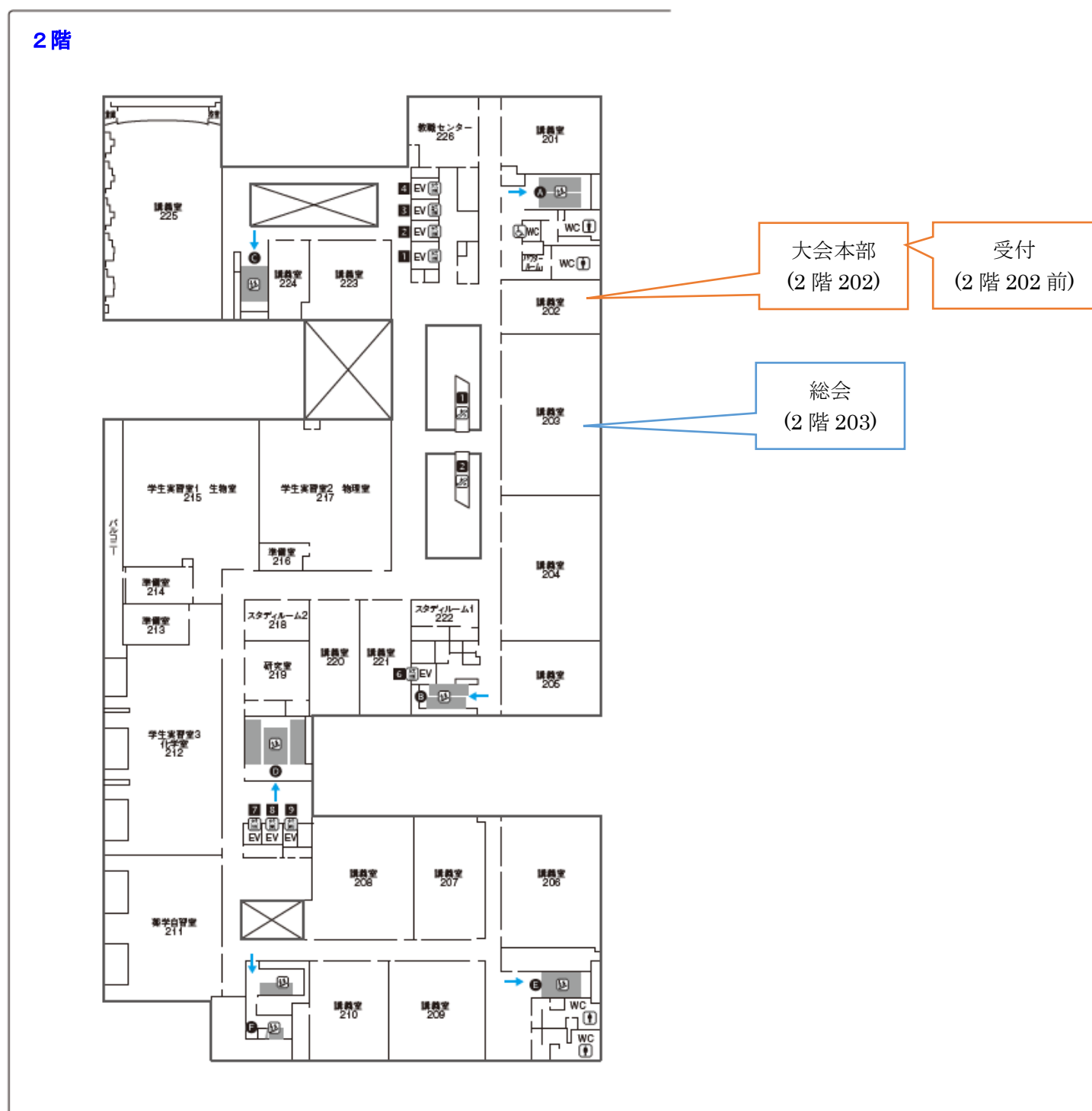


※ 使用教室において机や椅子を移動した場合は、分科会終了後に原状復帰をお願いします。
※ ごみは持ち帰りが原則です。会場に設置されたごみ箱は使用しないでください。

10月26日(土): 自由研究発表(B) 実践事例研究 (15時20分~17時20分) 2・3階

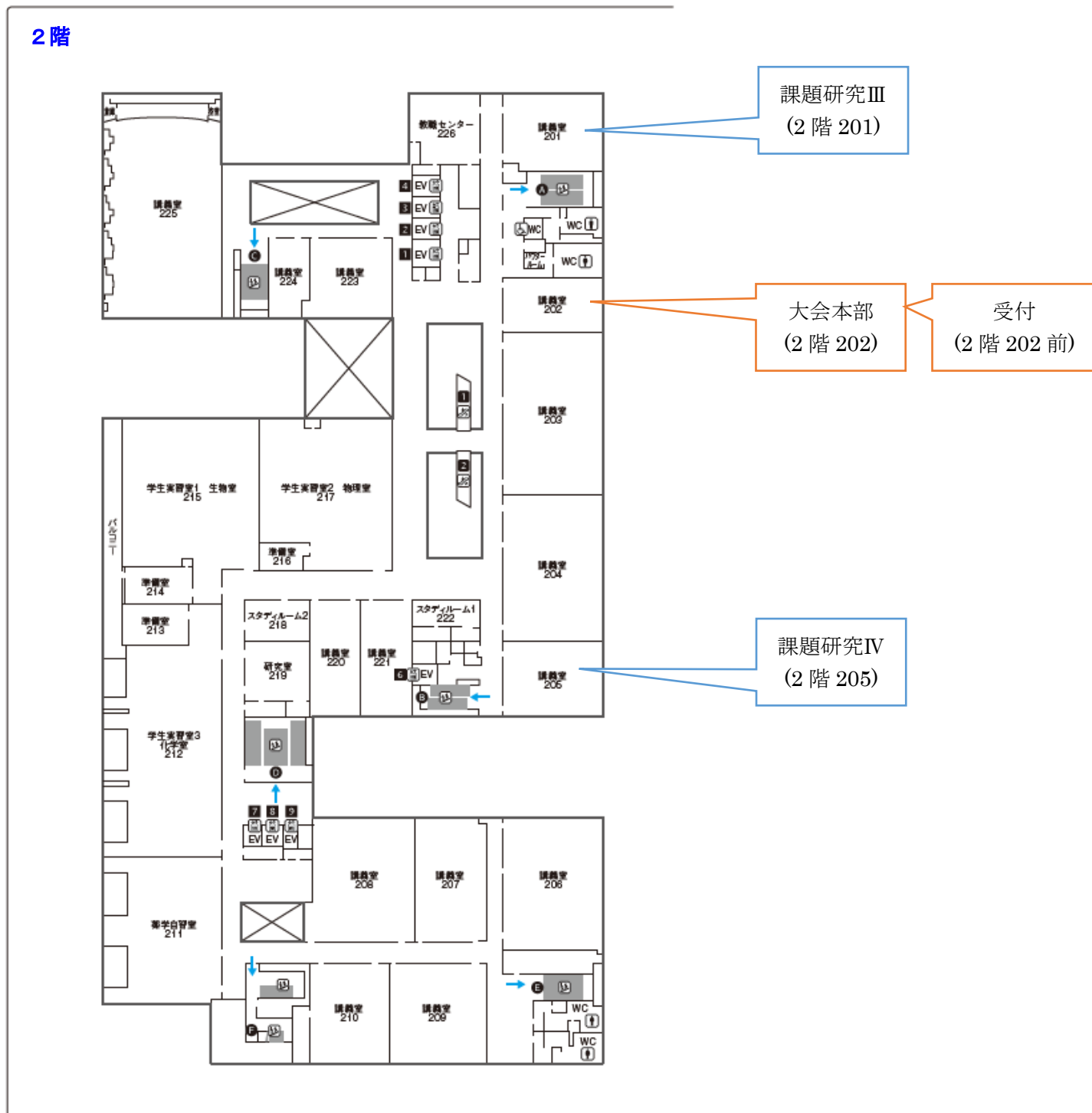


10月27日(日): 総会(9時20分~10時30分) 2階 304



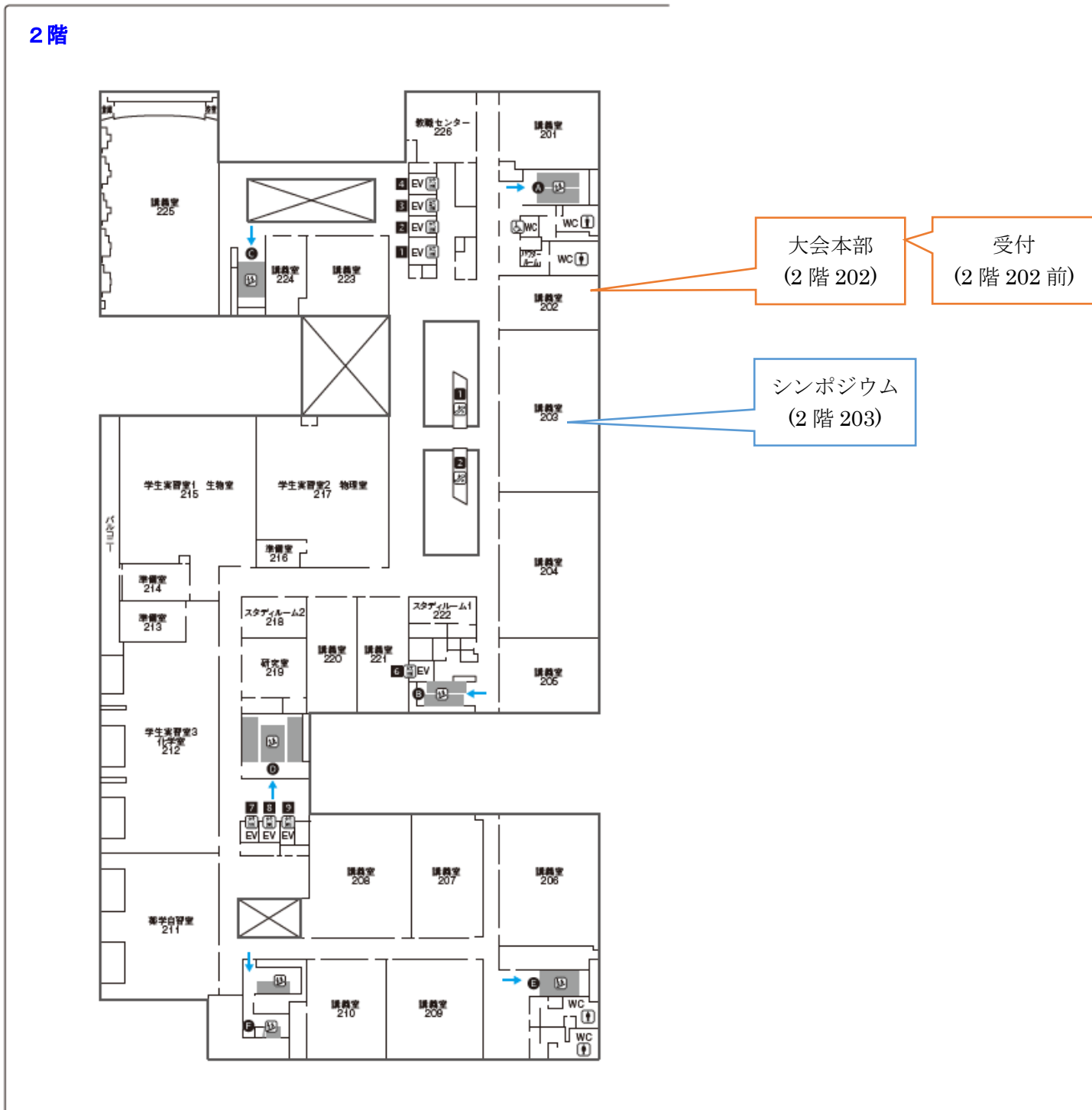
- ※ 使用教室において机や椅子を移動した場合は、分科会終了後に原状復帰をお願いします。
- ※ ごみは持ち帰りが原則です。会場に設置されたごみ箱は使用しないでください。

10月27日(日): 課題研究Ⅲ・Ⅳ (10時50分~12時50分) 2階



- ※ 使用教室において机や椅子を移動した場合は、分科会終了後に原状復帰をお願いします。
- ※ ごみは持ち帰りが原則です。会場に設置されたごみ箱は使用しないでください。

10月27日(日): シンポジウム(13時50分~15時50分) 2階 203



- ※ 使用教室において机や椅子を移動した場合は、分科会終了後に原状復帰をお願いします。
- ※ ごみは持ち帰りが原則です。会場に設置されたごみ箱は使用しないでください。

12. プログラム

1日目 10月26日(土)



- | | |
|-------------|-------------------|
| 9:30~ | 受付開始 |
| 10:00~12:00 | 自由研究発表(A): 一般研究 |
| 13:00~15:00 | 課題研究I・II |
| 15:20~17:20 | 自由研究発表(B): 実践事例研究 |
| 18:00~20:00 | 情報交換会 |



自由研究発表（A）：一般研究
10月26日（土）10：00～12：00

第1分科会

教師・援助者の連携と連帯

司会：堤 英俊（都留文科大学）
徳留 由貴（大阪青山大学）

10：00～10：25

- * 1990年代教育困難校における若手教師集団の教育実践と教育労働
—2000年代に過労死した公立高校A教諭の事例に見られる difference と absence —
宮井 真由（北海道大学大学院生、公立学校スクールカウンセラー）

10：25～10：50

- * 主体性の捉え方と幼保小接続

松永 康史（桜花学園大学）

10：50～11：15

- * 教員と特別支援教育支援員の子どもを中心に据えた連携
—「特別な教育的ニーズ」を有する児童の集団参加において—

木村 光男（常葉大学）

11：15～12：00

全体討議



自由研究発表（A）：一般研究
10月26日（土）10：00～12：00

第2分科会

子ども・若者の内面世界への接近

司会：氏家 靖浩（仙台大学）
平山 亜矢子（兵庫医科大学）

10：00～10：25

- * 予測的符号化に基づく包括的心理アセスメントを模索する
ー児童心理司の立場からー

安田 英広（北海道旭川児童相談所）

10：25～10：50

- * 自閉スペクトラム症児の心の理論の獲得と内面的変化についての考察
ー当事者の面接調査からー

戸田 竜也（北海道教育大学釧路校）

10：50～11：15（共同研究であるが発表者1名のため発表時間25分）

- * 大学生のメンタルヘルスを把握するのに終末糖化産物（AGEs）は有用か？
ーUPIとの関連から新規マーカーとしてのAGEsの可能性を考えるー

○ 小堀 晶子（新潟医療福祉大学）
松元 圭（新潟医療福祉大学）

11：15～11：40（共同研究であるが発表者1名のため発表時間25分）

- * 大学生の精神衛生問題に関する多角的データの検討
ーUPI、AGEs、自由記述の混合分析からー

○ 松元 圭（新潟医療福祉大学）
小堀 晶子（新潟医療福祉大学）

11：40～12：00

全体討議



自由研究発表（A）：一般研究
10月26日（土）10：00～12：00

第3分科会

子ども・若者・教育者による実践的模索

司会：泉 宜宏（都留文科大学）
首藤 貴子（愛知産業大学）

10：00～10：25

* 若者支援領域における実践者の価値形成プロセス

原 未来（滋賀県立大学）

10：25～10：50

* 実習生と実習指導者の対話によるエピソード記述作成の意義と課題

影浦 紀子（松山東雲女子大学）

10：50～11：15

* 地域教育コミュニティの拡張とデジタル・シティズンシップ教育との関連

朝倉 恵（さくらインターネット株式会社）

11：15～12：00

全体討議



自由研究発表（A）：一般研究
10月26日（土）10：00～12：00

第4分科会

子どもを理解すること

司会：久保田 治助（早稲田大学）
本田 伊克（宮城教育大学）

10：00～10：25

- * 小学校6年生における他者受容・他者からの受容・自己受容の関連をみる調査
—いじめ予防における大人の役割に着目して—

三木 悠永（鳴門教育大学大学院）

10：25～10：50

- * 教育実践における子ども理解に関する一考察
—現象学的研究における研究方法論を巡る論争を中心に—

藤原 由佳（広島大学大学院）

10：50～11：15

- * 小学校教師の専門性を考える
—その2—

北川 健次（相愛大学）

11：15～12：00

全体討議

10月26日(土) 13:00~15:00

課題研究Ⅰ：現代の子どもと子ども理解

子ども理解の深化に向けて、子どもの生きづらさの根源を問う
—第2回 トランスジェンダーが自分のままで生きられる社会・学校になるために—

報告1：性別にとらわれず「自分らしく」生きるために —トランスジェンダーの我が子と共に—
沼倉 智美 (ちばLGBTQフレンズの会代表)

報告2：性別違和を抱えながら生き延びる —学校教育を絶望から希望にするために—
永井 恵 (千葉県船橋市行田中学校教員)

コーディネーター：片岡 洋子 (千葉大学名誉教授)

<趣旨>

「子ども理解の深化に向けて、子どもの生きづらさの根源を問う」というテーマのもと、昨年度、第1回目では「セクシュアル・マイノリティの子ども生きづらさとその背景」に焦点を当て議論を行った。片岡洋子氏からは学校教育の現状と課題、国見亮祐氏からは当事者としての体験も含め、子どもたちのリアルな姿が報告された。それらを踏まえ、我々自身が性の多様性に関する概念を理解し、性的アイデンティティを自由に形成していける教育の課題を考え合うなかで、このテーマが、人間と社会に関する「常識」を厳しく問い直す新たな視野の開拓を求めるものであることを共通認識とすることができた。

第2回目の今回は、セクシュアル・マイノリティの子どもうち、生まれたときに割り当てられた身体や戸籍の性別と、自認する性(ジェンダー・アイデンティティ)が異なることによる性別違和のある子どもたちの生きづらさに焦点をあてて学び、考える。性自認は言葉の獲得期である3歳前後には自覚される。したがって早ければ、2,3歳頃に周囲からの認識と異なる性自認を抱いていることに気づき、性別違和を表明し始める子どももあり、個人差があるが、岡山大学ジェンダークリニックの中塚幹也教授のデータでは、就学前に約6割が性別違和を自覚しているという(中塚幹也『封じ込められた子ども、その心を聴く』ふくろう出版、2017年、49頁)。近年、文科省も性別違和や性的指向に係る児童生徒への配慮を通知し、学校現場でも研修が広がっているが、男女に二分する文化が根強い学校自体が、性別違和のある子どもに生きづらさを強いる場になっている。こうした学校の実情と向き合いながら、トランス男児とともに当事者親子のつながりをつくる活動をしてきた沼倉さんと、トランス女性であることをオープンにし学校や地域社会に性の多様性と人権尊重の教育を広める活動をしている中学校教員の永井さんの報告をもとに、トランスジェンダーの子ども生きづらさを理解し支える上での課題は何かを考えたい。

司会：筒井 潤子 (都留文科大学)

10月26日(土) 13:00~15:00

課題研究Ⅱ：子ども・若者の育ちや自立を支える地域からの共同

地域と学校における包括的で切れ目のない支援を考える
—地域教育運動から学校創設への取り組み、地域での切れ目のない子ども・若者支援にする営みに学ぶ—

報告1：地域とともに歩む新しい学校教育のかたち

細田 孝哉（北海道：まおい学びのさと小学校校長）

報告2：地域で子どもの成長・若者の自立に寄り添って

岸田 久恵（東京：特定非営利活動法人 猫の足あと代表）

<趣旨>

子ども・若者支援を考えると、「包括的で切れ目のない支援」は不可欠なキーワードだろう。けれどもこの課題研究においても、その実現には多くの難題があることが浮かび上がってきている。

まず、「包括的」であること目指さざるをえないのは、家族—学校—企業の調和的なトライアングルという企業依存主義的な日本型社会が大きな変容を遂げた後に、それに代わる普遍的で公共的な社会保障を打ち立てるところか、「自己責任」や「家族依存型福祉」を命題とする社会によって、安心・安全な時間・空間がより削ぎ落とされ、負荷が大きくなった家族と個人の生活の多面的な不安定化が進んできたからである。結果的に「7人に1人の子どもが相対的貧困状態」「調査史上最大の不登校数」や「雇用者の4割が非正規という生活の不安定化」など、子ども・若者の学校ならびに学卒後の生きづらさが構造的に生じており、その生活は領域ごとに分断できない総合的なものであり、ニーズも多方面に連動し、支援も包括的で総合的なものとならざるをえない。医療・福祉・心理・労働・教育等々多様な領域の支援機関、社会的諸資源の連携が求められてきている。けれども、それは領域毎の原理や対象の違いを含めて簡単ではない。その中で地域の中の社会的諸資源の一つである学校は、あらためて等身大にどう学びと支援の根拠地として位置づけられるのか、模索が続いている。

また、「切れ目のない支援」には、学校在学時における宿題をはじめとした学習支援や子ども食堂などの食支援も地道に取り組まれているが、学卒後の若者の就労支援や自立支援においては、明らかに質的に異なる社会的諸資源の組織や支援の質的転換が求められるだろう。なぜなら、「7人に1人の子どもが相対的貧困状態」「雇用者の4割が非正規という生活の不安定化」に象徴される生活の下で、離家の課題や生活規律の獲得を含んで経済的精神的自立における学卒後の若者にかかる負荷が、かつての比ではないからである。つまり、子ども時代から若者の自立に至る支援は、かつてより明らかに長期にわたり、かつ子ども・若者が潜在的に力を持ちながらも抑圧されている、生活の当事者としての社会的な力をエンパワーするような、質的に異なる深く長い支援が求められてきている。

前者を、まず地域教育運動から生み出された「新しい学校教育のかたち」を、「地域とともに歩む」形で追求しようとしている「まおい学びのさと小学校」報告から考え合いたい。また、後者を「地域で子どもの成長・若者の自立に寄り添って」、学卒後の若者へも「切れ目のない支援」を届けようとしている「猫の足あと」の報告をもとに議論し合いたい。そして両者をつないで、今回のテーマに少しでも迫りたいと考える。

司会：池田 考司（札幌学院大学）

富田 充保（相模女子大学）



自由研究発表(B)：実践事例研究
10月26日(土) 15:20~17:20

第1分科会

子どもの育ちとことば

司会：佐藤 隆(都留文科大学)
吉益 敏文(豊岡短期大学)

15:20~16:20

* 言葉を大切にすること

—高等学校国語科の授業実践より・現象学の視点から—

佐藤 聖子(千葉黎明高等学校)

16:20~17:20

* 小学校から中学校への過渡期に活かす詩の授業

—施設分離型小中連携における実践から—

加藤 恵美子(桃山学院教育大学)



自由研究発表（B）：実践事例研究
10月26日（土）15：20～17：20

第2分科会

発達援助専門職の養成と自己教育の課題

司会：荒木 実代（神戸医療未来大学）
山内 清郎（立命館大学）

15：20～16：20

* Hospital Play Specialist の経験に見る小児臨床現場における医学、看護学教育の課題
－「Hospital Play Specialist 基本調査」の混合分析から－

- 松元 圭（新潟医療福祉大学）
- 松平 千佳（静岡県立大学短期大学部）

16：20～17：20

* 架空事例を用いた教職員研修の実際

村澤 博美（高校スクールカウンセラー）



自由研究発表(B)：実践事例研究
10月26日(土) 15:20~17:20

第3分科会

実践を綴ること・振り返ることの意味

司会：穴戸 良子（作新学院大学女子短期大学部）
吉岡 眞知子（東大阪大学）

15:20~16:20

* 「ともにつくる」保育と往還する保育記録の在り方の検討

—実践の当事者である教師の「綴る」という行為に着目して—

立溝 まい（奈良女子大学附属幼稚園）

16:20~17:20

* 私の40年間の大学教育実践等の歩みを振り返り、希望のありかを探る

前島 康男（元東京電機大学）



自由研究発表(B)：実践事例研究
10月26日(土) 15:20~17:20

第4分科会

不登校の子ども・若者から

司会：邊見 信(都留文科大学)
春日 香(Horus臨床心理相談室)

15:20~16:20

* 不登校生徒を対象とした運動プログラムのアクションリサーチ

- 藤川 和俊(東京国際大学)
- 金井 玲奈(桜美林大学)

2日目
10月27日(日)



9:00~ 受付開始

9:20~10:30 総会

10:50~12:50 課題研究Ⅲ・Ⅳ

13:50~15:50 シンポジウム

10月27日（日）10：50～12：50

課題研究Ⅲ：発達援助実践と発達援助専門職

発達援助専門職の専門性を再考する（2）
—臨床教育学において「発達援助」をどう考えるか—

報告1：複雑化する学生支援

—“今”に寄り添う発達援助・今後の大学教育の在り方について考える—

中西 千奈都（東大阪大学）

報告2：教育実践・発達援助実践における「presence（いまここにいること）」の感覚

渡邊 由之（東大阪大学）

<趣旨>

日本臨床教育学会が設立されてから13年が経った。人々を取り巻く格差はいまだ厳然として存在し、社会構造の歪みは子ども・若者の育ちに揺れと不安をもたらしている。学会の設立趣意書にあるように、臨床教育学は「総合的な人間発達援助学」である。人間の発達を援助することは容易なことではないが、その時代の日常的な実践に目を向け、そこにある問いの深さを確かめ、あたらしい課題と意味を見出すことで、発達援助そのものに寄与する道が拓ける。そして人間発達援助学としての方向性も見えてくるのだと思う。

臨床教育学は総合的かつ学際的な学問である。それゆえ、焦点課題を定めることもまた容易ではない。しかし、子ども・若者・おとな・老人の生活現実への理解を深めることと、人々の生存と発達を支える発達援助について探究することは、設立趣意書にも示されているこの学問の柱であり、それを続けることにこそ臨床教育学の意味がある。そのため、発達援助現場の声に耳を傾け、学問としての方法・概念・思想を生み出そうとする臨床教育学の方法論を、今回の課題研究においても重視したい。

今回は、大学での発達援助実践を通して、子ども・若者の生活現実と、発達援助の課題に迫りたい。大学という場は、子ども・若者の子ども時代の終着点に位置しており、かれらがこれまでどのように生きてきたかが仄見えることがある。かれらの語りは、幼少期、小・中学校、高等学校、大学までのかれらの生活史を串刺しにて生まれてくる。かれらの生活現実、かれらとその家族がたどった歴史に根差しており、発達援助の困難さを思い知らされる。子ども・若者への発達支援は、「いま」という点から「今まで」という線にとらえ、「これから」の延長線を伸ばせるようなものでありたいが、ここにも簡単には乗り越えられない壁がある。

上記の問題意識のもと、今回の課題研究Ⅲにおいては、今日の発達援助実践、とりわけ子ども・若者の発達援助について大学教育の現場から問うてみたい（報告1）。そのうえで、いま、子ども・若者・おとなの生活世界で何が起きているのか、これからの人間発達援助に必要なことは何であるのかを考えたい（報告2）。報告を通して、参加者とも互いの問題意識を語りあえればと考えている。

司会：吉益 敏文（豊岡短期大学）

10月27日（日）10：50～12：50

課題研究Ⅳ：教師の専門性の再検討

「教員不足」時代のなかで問われる教師の専門性

報告 1：「教員不足時代」における本質的な課題

大口 久克（北海道・教育委員会）

報告 2：教職志望の学生・若手教員とともに考える教師の専門性

泉 宣宏、阿部 真一（都留文科大学教職支援センター）

コメンテーター：佐藤 隆（都留文科大学）

<趣旨>

「教員不足」が深刻となっている。文科省はこの事態に対して教職科目の履修経験を持たない人への特別教職免許状の発行や、教育実習さえ経験していない大学 3 年生までをも「採用試験」対象者にするなど、教員の確保に躍起になっている。他方で 2022 年に出された中央教育審議会答申は、教師が「志気高め、誇りを持って働く」ために「新たな教師の学びの姿」を提起し、教育委員会による「研修履歴」の記録とそれを活用した資質向上に関する指導助言の仕組みの導入をめざしている。

しかし、これらの政策の組み合わせによって、教師の仕事が「単純化」され、その結果として教師は与えられた職務を遂行するための能力開発に励まざるをえなくなるのではないだろうか。その意味で、教師は専門的な自律性を発揮する余地を奪われ、子どもとの直接的な関係のなかから自らの仕事のやりがいを見いだすことや、教師として成長していく実感を得ることがますます難しくなっていくことが危惧される。このような状況の中で、子どもの育ちを支え励ますべき発達援助専門職としての教師の仕事のありようをあらためて問う必要があるのではないか。

今回の課題研究Ⅳでは、次の 2 点を検討したい。

- ① 「教員不足」時代の中で、上から提起される「働き方改革」や対処療法的な教員確保政策が、教師の志気と誇りを奪っている現状を明らかにするとともに、教師の働きがいをどのように再構築していくのかを検討する。
- ② 若い教師や教職をめざす学生たちが、教師の専門性をどのようにイメージし、そのイメージを具体化できるようにしていくために、教師教育関係者に求められていることは何かについて検討する。

司会：春日井 敏之（近江兄弟社高等学校、立命館大学名誉教授）

福井 雅英（元滋賀県立大学）

10月27日(日) 13:50~15:50

シンポジウム

臨床教育学設立15年研究誌公刊企画に向けて(Ⅲ)
いま、教師にとって「子ども理解」の専門性とは何か

基調報告：庄井 良信(藤女子大学)
報告1：松田 慎一郎(札幌市立有明小学校)
報告2：沼田 あや子(立命館大学)
コメンテーター：福井 雅英(元滋賀県立大学)

<趣旨>

日本臨床教育学会が発足して13年目を迎える。設立当初から、日本臨床教育学会は、一貫して次の3つの問いを共有してきた。

1つは、多様で複雑な社会を生きる子どもの存在(being)そのものに寄り添い、その「理解」を深め続ける実践とは何か、という問いである。そこには、「危機」の時代に、人間の尊厳、ケアの倫理、社会的正義・公正について根源的問いと叡智を探究する臨床教育学の哲学である(第12回大会)。

2つは、心理、福祉、看護、司法、医療などの教育関連専門職の人々が、学校の教師と多職種で協働する中で、自己の専門性をどのように再考し、高めていけるのかという問いである。子どものかけがえないのちそのものに伴走する地域の発達援助者として、学校の教師と対話・協働し、それぞれの人間発達援助の専門性について問い直す研究と実践の教育的価値が再考された(第13回大会)。

3つは、教師は、日常の教育実践の中で、子ども理解をどのように深め、自らの教師としての専門性(臨床的実践の力量)をどのように高めようとしているのかという問いである。それは、日々の授業や生活の中で、対話をとおして子ども理解(child understanding)を深める教育実践に光をあて続ける教育実践の価値を、再認識・再評価する問いでもある。

これは、学校の教師が、困難を抱えた子どもの理解と支援のために、同僚はもとより、心理・福祉職などの教育関連専門職の人々とも出会い、協働する中で、教師に求められる対人援助・発達援助の専門性をどのように意味づけなおしていくのか、という問いでもある。それは、授業と生活指導(学ぶことと生きること)を深く結びつけた実践が持つ意味を、いま、どのように再発見していくのかという問いでもある。この問いは、今日、教師の働き方改革や、教師教育のカリキュラム改革(教員の養成・採用・研修)の問い直しとも密接に結びついている。

今回のシンポジウムでは、3つめの問いに焦点を絞りたい。はじめに、いま教育者としての教師が高めるべき子ども理解の専門性とは何か、という問いについて、学校の教師とスクールカウンセラーのお二人から、実践に基づく提言をいただく。それらを受けて、教員の養成と研修を担いつつ子ども理解の実践を創造してきた教育者(educator)の立場からコメントを得たい。その後、いま危機の時代を生きる教師が、問うべき問いの糸口を参加者と共に明らかにし、近未来の教師像の希望を探究したい。

司会者：田中 昌弥(東京経済大学)
土永 葉子(帝京平成大学)



【第 14 回研究大会に関する問い合わせ先】

日本臨床教育学会事務局

〒577-8567

大阪府東大阪市西堤学園町 3-1-1 東大阪大学 渡邊由之研究室

E-mail : crohde2011@yahoo.co.jp